

私が選んだ場所

「社会を変える」という言葉を聞くと、自分には縁のない大きな出来事を思い浮かべてしまう。いつも教科書で見るような、大きなものだ。しかし、そんなことはなかった。私にとっての変革は身近で静かな、一つの決断から始まっていた。

中学生の頃の私は、理科の実験やものづくりに強く惹かれていた。自分の手で何かを組み立て、仕掛けが思い通りに動く過程が面白かった。そして自分の可能性を広げるため、高校の進学先として科学技術科を選んだのだ。進学が決まった時は、高校生になる日を心から待ち望んでいたことを鮮明に覚えている。だが、入学して初めて、ただ「好き」という気持ちだけでは越えられない目に見えない壁があることを知った。

登校初日、教室を見渡すと女子生徒の姿はわずかだった。理系は男性が多いことは当然のように知っているつもりだったが、実際にその場に立つと息をのむほどの緊張感に包まれた。不安になって周囲に相談すると、「理系なんだから女子が少ないのは仕方ないよ」という言葉が返ってくる。慰めのつもりだったのだと思う。それでも当時の私は、「覆せない現実だ」と突きつけられた気分だった。

教室では周囲の視線ばかり気になっていた。一方で、実習室では自然と目の前の課題だけに集中できる。「好き」という気持ちは不安よりも強いのだ。ふと思った。ものづくりは決して嘘をつかない。正しく手を動かせば結果は返ってくる。間違えれば動かない。ただ、それだけだ。そこに「男子・女子」という概念が入り込む余地はどこにもなかった。性別の違いや周囲の視線を気にしていたのは、勝手に身構えていた私自身だったのだ。「挑戦したい」という純粋な好奇心が、私をここまで連れてきてくれたのだと思い出した。

今、科学技術科で学んでいることは決して当たり前ではない。かつて女性が十分に学ぶ機会を得ることさえ難しかった時代に、津田梅子は女性が学ぶ道を切り開いた。その姿は時代の「当たり前」に疑問を持ち、一步を踏み出すことが未来を変える力になることを私に示している。私もまた、自分の目の前にある壁と向き合いながら、挑戦する姿を未来へ繋げていきたい。

思い込みを一つ壊し、「好き」という気持ちを信じ続けることが、いつか誰かの気持ちを後押しするのではないか。その気づきが、私にとっての確かな変革だった。変えたいのは、女子が少ないことを当然として受け入れてしまう空気だ。「理系だから」「女子だから」という理由で、自分の好きなことへの挑戦を躊躇してしまう、その風潮である。

あの日、教室の隅で一步引いていた私には想像できなかった。変革とは、世界を大きく変える特別な出来事ではない。一人ひとりが「当たり前」を見直し、自分の可能性を信じて踏み出すことから始まるのだと。私が選んだこの場所で、これからも技術と向き合い続けたい。いつかこの選択が、誰かの「好き」を形にする一步になるように。